

## 〔講演要旨〕 佐渡の沿岸集落での歴史津波の浸水高さ

都司嘉宜<sup>1</sup>・岩瀬浩之<sup>2</sup>・原 信彦<sup>2</sup>・久保田 徹<sup>2</sup>・岩渕洋子<sup>3</sup>・今村文彦<sup>4</sup>

1 深田地質研究所, 2 (株) エコー, 3 (独) 原子力安全基盤機構, 4 東北大学災害科学国際研究所

1. 佐渡を襲った歴史地震津波 新潟県の佐渡島には、A.寛保元年(1741)渡島大島噴火津波、B.宝暦十二年(1762)佐渡近海地震、および C.天保四年(1833)出羽沖地震、の三度の歴史津波記録がある。さらに、1983年日本海中部地震、および、1993年北海道南西沖地震の津波によって、島北端部の北鶴島、願(ねがい)、鷲崎などに被害を生じた。歴史記録に記載のある各点の現状視察と、測定予定点の決定を行うため、2013年1月に図1の19地点を踏査した。



図1 佐渡を襲った3度の歴史津波の被災地点

2. 願・北鶴島・鷲崎のようす 歴史上の3度の津波で、いつも津波高が最高となったのは島北端の願・北鶴島・鷲崎の3ヶ所である。B.宝暦十二年(1762)の津波では「鶴島村へ高波打上げ、家数二十六軒流失せし次第を江戸表江申上る」(『佐渡年代記』)と記され、これは全戸流失に近い。C.天保四年(1833)出羽沖地震津波では、島北端の願、鶴島、真更川の3地区で併せて「真更川、鶴島、願で破損家235軒、流失納屋46軒」(『佐渡年代記』)と記され、『新潟県の地名』(平凡社)によって江戸期のこの3村の戸数を調べると、各

村のほぼ全家屋が津波で破損していたことがわかる。図2に北鶴島(島南部の同名の鶴島と区別するために、北鶴島と表記される)の写真を示す。山地が海岸線にせまっておき、わずかな平地に市街地をおくが、家屋の敷地を増やす余地がほとんど無く、現地に住む人の証言からも江戸期と現代とで戸数はほとんど増減していないことがうかがえる。



図2 北鶴島の津波到達点(筆者の立っているところ)

写真において、筆者の立っているあたりが集落の一番山側の点であるが、ここで標高がおおよそ9mである(地元の津波標識による)。B.C.の津波とも、ここで少なくとも標高9mの敷地に立つ家屋が流失している。

### 3. 佐渡市両津の教育委員会所蔵の大絵図

佐渡市両津の教育委員会所蔵の、『佐渡大絵図』によって、古記録に名前は出現するが現在の地図では消滅した集落の位置を確認することが出来た。GPS式測量器械による津波浸水標高の調査は2013年8月に実施する。



図3 佐渡市教育委員会所蔵『佐渡大絵図』